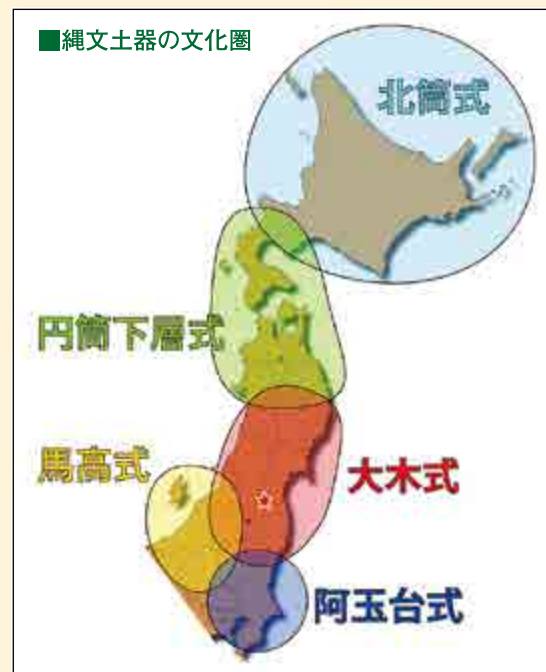


全国の縄文ミステリー

えんとうどぎ 円筒土器文化圏

- 津軽海峡をはさんだ地域に共通の祭祀具、土器が分布することが意味するもの
- なぜ海峡を挟んで文化が共通するのか
- なぜ陸続きの東北部と東北北部の文化が違うのか



ばんじょうどぐ
■板状土偶の分布



講談社「日本の歴史01 縄文の生活誌」より転載
せいりゅうとうがたせっき
■青龍刀形石器の分布

ふくしきろ 複式炉

- なぜ縄文時代中期の終わりに南東北を中心とした地だけで使用されたのか
- なぜ縄文時代後期には消えたのか



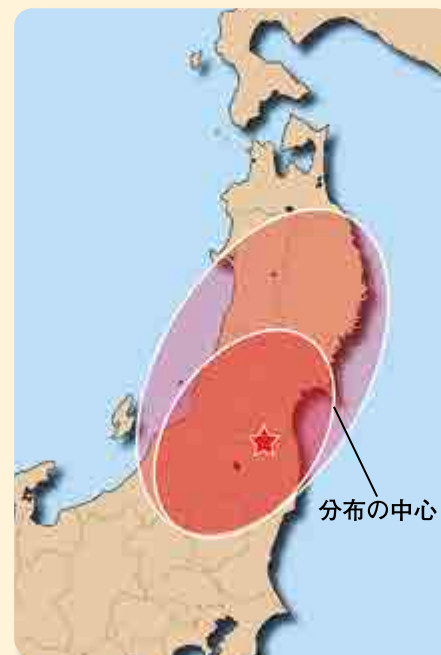
はくさんいせき
■複式炉命名のきっかけとなった白山遺跡の複式炉



あたごはらいせき
■複式炉のある竪穴住居(愛宕原遺跡)



■土器埋設部の断面(和台遺跡)
土器のまわりの土が熱を受けていることから、土器の中でも火を使用したことがわかる。



■複式炉の分布



※いずれも
青森県教育庁
文化財保護課
提供



宮畑ミステリー大賞

- 募集作品 宮畑遺跡の2つの謎をテーマにした小説および漫画
- 募集期間 平成26年4月～平成27年3月
- 審査員予定者 佐藤B作氏(俳優) 佐藤秀峰氏(漫画家) 清水克衛氏(書店「読書のすすめ」代表・本のソムリエ)

※株式会社現代書林の協賛により、最優秀賞・優秀賞と特別賞数点を単行本で出版予定。

宮畑ミステリー大賞関連事業

宮畑公開講座

平成26年2月2日(日) 午後2時～午後4時 福島テルサFTホール

「宮畑ミステリー大賞のテーマ」

謎 その1 直径90cmの巨大な柱

謎 その2 47.82%の焼かれた家

対談

奥松島縄文村歴史資料館名誉館長

岡村 道雄氏

青森県教育庁文化財保護課長

岡田 康博氏

縄文人とその精神文化

自然への畏怖と共存

神・精霊

生と死

墓

1万年

平和

まつり

定住・むら

階層・リーダー

交流・交易



まつりの道具(宮畑遺跡)



まつりの道具(宮畑遺跡)



ヒスイ製大珠
(月崎遺跡)



土偶(上岡遺跡)



狩猟文土器(和台遺跡)



人体文土器
(和台遺跡)



竪穴住居の石棒(愛宕原遺跡)



土偶の出土状況(宮畑遺跡)

なぜ、直径90cmもの 巨大な柱を建てなければ ならなかったのか？

ほったてばしらたてもの 掘立柱建物の発掘調査状況



■直径90cmの柱を使った掘立柱建物の調査状況
人が入っている穴が柱穴。右の筒状に黒い部分が柱の痕跡



■復元した掘立柱建物
一番手前が直径90cmの柱を使った掘立柱建物。
柱の地上高は4mで復元。



■掘立柱建物群北側の埋甕群※幼児の墓
左は検出状況。2個一対で埋設されている。右は埋設状況の復元展示。



■復元した掘立柱建物

柱直径は30cm。同じ位置で5回の
建て替えが行われている。



■掘立柱建物群南側の埋甕群

10基以上の埋甕が掘立柱建物の
南に埋設されている。



■縄文時代晩期の掘立柱建物群

宮畑縄文人が残した 2つのミステリー(謎)

本当にミステリー？ なぜミステリー？

弥生時代	2,000年前		
	謎 その1 (縄文時代晩期) 「直径90cmの巨大な柱」	宮 畑 遺 跡	
	3,000年前 縄文時代後期のむら 家を焼く風習も 掘立柱建物もないむら		
	4,000年前 謎 その2 (縄文時代中期) 「47.82%の焼かれた家」		和台遺跡
	5,000年前		
縄文時代	6,000年前		

なぜ、47.82%の家 (竪穴住居)は 焼かれたのか？



■縄文時代中期の家(竪穴住居)の分布

- 燃えにくい土屋根の竪穴住居が、46棟のうち22棟 (47.82%) 焼かれた宮畑縄文むら。
- これほど多くの家が焼かれた縄文むらは全国でも宮畑縄文むらだけ。
- なぜ、宮畑縄文人は家を焼いたのか？
- なぜ、すべての家を焼かなかったのか？
- なぜ、宮畑縄文むらだけなのか？



■20号住居

左半分の床に焼土が最大で42cmの厚さで堆積し、レンガのように非常に硬い焼土も存在。
左半分の床で燃料となる材を燃やし、住居を焼いている。



■復元した49号住居

下の写真の調査成果にもとづき土屋根住居として復元

49号住居(右の復元住居)の発掘調査状況



■焼土検出状況

住居全体に焼土が堆積している。



■炭検出状況

焼土の下には細かな炭が床全体に
広がっている。



■家を焼いた痕跡

柱と柱の間に置いた燃料を燃やして
家を焼いている。



■焼土の状況

焼土は大きいものでは20cm程度の
塊が存在する。



■炭の分布状況

屋根や柱に用いられた材は薄く細かな
炭となっている。

さんないまるやま 三内丸山遺跡(青森市)



■大型掘立柱建物の柱穴

6本の柱を埋めた穴が発見されている。

■三内丸山遺跡の建物復元状況

手前の6本の柱を使った建物が大型掘立柱建物

※いずれも青森県教育庁文化財保護課提供

三内丸山遺跡の大型掘立柱建物

- 柱の直径は最大で103cm。
- 直径1mの場合14～23mの高さと推定されている。
- 性格としては灯台、魚の見張り台、拠点集落としてのランドマーク、祭殿などが考えられているが、他の掘立柱建物と異なる広場に存在するため、大集落をまとめるために必要な宗教的な施設の可能性があると考えられている。

宮畑遺跡の掘立柱建物

宮畑遺跡では、居住施設と考えられる竪穴住居が一定数存在しないことから、掘立柱建物は居住施設の可能性も指摘されているが、掘立柱建物と埋甕(幼児の墓)との間に強い関連性があることから、非日常的な施設として復元整備を行っている。

石斧での柱穴の掘削と直径90cm木材の伐採、重さ数トンの木材の運搬と柱穴に据える作業、そして建造には多くの労力を必要としたことは想像に難くない。

他のむらでは必要としない巨大な柱を使った掘立柱建物が、なぜか、宮畑の地には存在したのである。

家を焼かなかった和台むら(飯野町)



宮畑遺跡から直線距離で約16kmの位置にある和台遺跡は、宮畑遺跡で家を焼いたむらと同じ時代のむらである。230棟の竪穴住居の調査を実施しているが、焼かれた家は存在していない。家を焼く行為は行われていなかったのである。

土屋根住居の焼失実験

御所野遺跡(岩手県一戸町)で土屋根の竪穴住居を燃やす実験が行われたが、土屋根住居の中は酸欠状態となりやすいため、茅葺屋根の住居より燃えにくいことが確認されている。

※一戸町教育委員会提供



宮畑遺跡の焼けた家

縄文遺跡では、特別な家が放火された例が確認された集落も認められる。しかし、宮畑遺跡では、焼かれた家と焼かれていない家に違いを見出すことはできない。また、集落が存続した期間に、焼かれた家と焼かれない家が認められ、家を焼く行為が行われ続けている。

この家を焼く行為は、縄文時代中期の宮畑縄文むらに定着した風習といえるが、和台遺跡などの福島市内の同じ時期の縄文集落で認められず、全国的にも他に例をみない独自の風習といわざるをえない。

現時点での考古学的な成果からは、その謎を解決できない人間のドラマなのである。